



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	知的障害児の弁別学習過程の特性に基づく学習支援に関する研究(論文要旨)
Author(s)	喜多尾, 哲
Citation	
Issue Date	2014-03-14
URL	http://hdl.handle.net/2309/138590
Publisher	
Rights	

氏 名 : 喜多尾 哲
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博乙第 75 号
学位授与年月日 : 平成 26 年 3 月 14 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 2 項該当 論文博士
学位論文名 : 知的障害児の弁別学習過程の特性に基づく学習支援に関する研究
論文審査委員 : (主査) 教授 生川 善雄
(副査) 教授 伊藤 友彦 教授 蘭 千壽
教授 細瀨 富夫 教授 小宮山 伴与志

学位論文要旨

1. 子どもを対象とした学習研究の手法として、しばしば弁別学習が用いられる。弁別学習は比較的単純な学習様式であるが、それは注意、強化等、広範囲な心理学的過程と関連している。それゆえ、この領域での実験的研究によって、知的障害児の基礎的な学習能力や学習過程の特性が明らかにできるものと予想される。

知的障害児における手がかり学習機制の発達には健常児と同様に単純な道具的反応のみの学習様式からより高次の媒介型反応様式へと移行するが、その過渡期は健常児に比べて MA 2～3 歳程度遅れる (おおむね MA 7,8 歳) と指摘されている。しかしながら従来の研究で対象とされた知的障害児は軽度知的障害が主であり、それより知的水準が低い中度以下の知的障害は対象になっていない。中度以下の知的障害児の精神発達 (MA) は媒介型学習様式に移行する年齢までには至らないと考えられる。そこで中度以下の知的障害児の学習特性について、系統的に検討する必要がある。これらの点をふまえ、本研究では以下の点を主要な目的とする。

① 中度知的障害児を主な研究対象とし、中度知的障害児の学習過程の特性を健常児および軽度知的障害児と比較検討する。

② 中度知的障害児における学習の劣弱性を改善するための手段について検討する。

うへの目的を検討するために学習課題としては弁別移行学習課題を使用する。

2. 中度知的障害児の学習特性について、手がかり間の類似性の分析から、知覚的な影響の受けやすさについて検討した。ついでブロック毎の正反応率の変化および誤反応の分析を通して適切次元を把握する速さおよび的確さを検討した。

手がかり類似性の分析では、中度知的障害児は学習刺激による知覚的な影響をより強く受けることが明らかとなった。正反応率の変化をみると、健常児と軽度知的障害児は先行、移行両学習とも学習開始後、素早く適切次元を把握することがうかがえた。これに対し、中度知的障害児は先行学習において正反応と誤反応をくり返ししながら徐々に正答率を高めていく傾向が強かった。また、移行学習直後に先行学習の手がかりに固執する反応もみられた。誤反応分析で

は知的障害児は学習材料の刺激属性には含まれない、位置次元に対する偏好・偏嫌反応が顕著であることが認められた。

中度知的障害児は精神発達の上限が MA6 歳程度であることから、単純な道具的反応の反応から次元性の媒介型反応への移行は難しいと思われる。中度知的障害児は学習に必要な手がかりを早く、正確に把握することが困難なために適切次元を媒介とした反応に至らず、刺激の知覚的な影響を強く受けるなど不安定な反応をするのではないかと考えられた。

3. 知的障害児とくに中度知的障害児における弁別学習の困難さを改善するための学習支援方法として、非言語的訓練方法である過剰訓練と言語的訓練方法である言語教示（言語命名、言語化）訓練の効果を比較検討した。

過剰訓練については、とくに中度知的障害児において効果が顕著に認められた。このような訓練は、中度知的障害児の適切次元への非言語的な注意媒介機能を高めること、移行学習事態において先行学習での手がかりの消去を促進する効果があると考えられた。

言語教示については、知的障害児は言語命名訓練による次元性言語媒介反応の促進効果は認められたが、言語化訓練による効果は認められなかった。言語教示の効果を中度および軽度知的障害児に分けてみると、中度知的障害児は言語化訓練によって先行学習における手がかりと言語ラベルとの結びつきは強められるが、その結びつきが強くなりすぎるため、移行学習においては道具的反応の転換が容易にできない結果に至ることが明らかとなった。

知的障害児におけるこのような困難さを改善するため、適切および不適切両方の手がかり名を併せて言語化させると、逆転移行学習を大幅に促進させることができた。その理由として、両方の手がかりの言語化訓練は適切次元内の適切および不適切な手がかりの関係が明確になることにより、注意あるいは言語媒介の利用が容易になるためではないかと考えられた。

最後に、中度知的障害児にみられる学習特性が重度の知的障害児にも見出されるかどうかについて検討するため、1次元2価課題を用いて弁別逆転学習を行った。この結果、重度知的障害児においても次元分類などの指導によって学習が達成できること、さらに一度学習を達成すると、その内容は経年的に保持されること、また経年的な反復学習により学習の達成が促進される傾向にあることが明らかになった。反復学習は、一度学習が成立したあと同じ学習課題を繰り返すという点で過剰訓練と似ている。学習の反復は過剰訓練と同じような学習の促進的効果を持つと考えられた。

4. 今後は中・重度知的障害児における弁別学習過程について事例数を増やしてさらに検討し、より確定的な知見が得られるようにする必要がある。また、個々の事例を縦断的に検討することも重要な課題だと考える。